

第4回絹谷幸二賞贈呈式

35歳以下の画家を応援し、具象絵画の可能性を問うことを目的とした第4回絹谷幸二賞(毎日新聞社主催、三井物産)の贈呈式がこのほど、東京都千代田区の如水会館で開かれた。出席者約100人が、絹谷幸二賞の後藤靖香さん(30)、奨励賞の指田菜穂子さん(28)を祝福した。岸桂子、永田晶子、写真・三浦博之。

力強さと緻密さ、前途に期待



おける企画で発表した大作家が、指田さんは東京都中央区の西村画廊で開いた個展の作品群が評価された。講評に立った山下さん

は「後藤さんは、とてもない大作。モノクロームでいくと力強く描き進めただけでなく、場介。また、絹谷さんが31歳の歴史を踏まえたインスピレーションの要素も評価に立った山下さん

人間賛歌としての絵を描いていく絹谷幸二賞 後藤靖香さん 大きな賞をいただき、本当にありがとうございます。この作品は、大阪府が主催する公募企画の一環で、造船所跡地という発表の場をいただき

経歴忘れられる画家になりたい 奨励賞 指田菜穂子さん 百科事典にある言葉を紡ぎながら画面を構成するアイデアは、5年ほど前から考えていました。形になるまで時間がかかりましたが、個展の場

賞の賞味期限後に次のステップへ 絹谷幸二さん 後藤さんの絵には大陸のともいえる壮大な規模感があります。方指田さんの絵は、日本人が得意とする小さく精巧な作品です。こちらも素晴らしい。僕が安井賞をいただいた時の経験から言いますと、賞の「賞味期限」は3年半ぐらいです。お二人にはその間に多くの方と知り合い、次のステップへと踏み出してほしい。皆様には、ぜひ温かく見守り、ご支援くださるようお願いいたします。

戦艦大和の慰霊祭 ツアー参加者募集 4月7日、鹿児島県の徳之島で「第45回 戦艦大和を旗艦とする特攻艦隊戦没将士慰霊祭」が営まれる。旅行会社がツアーの参加者を募集している。太平洋戦争末期の1945年4月、米軍が上陸した沖縄に向けて出撃し、撃沈された「大和」を中心とする艦隊の戦没者を弔う。会場は、慰霊塔のある徳之島伊仙町の犬田布(いぬたぶ)岬。この慰霊祭は、毎年行われている。東京または鹿児島島出発で2泊3日。他所からの出発も可。料金など問い合わせはさくらツアー(☎03・6858・3020)へ。

音楽

白井光子とハルトムート・ヘルの日本歌曲リサイタル 評・梅津時比古

立ちのぼってくる日本語

ゆくゆくその基本的態度においては、彼らが熟成を積んでいるドイツ歌曲への取り組みと同じである。しかし白井は日本語の響きを母音の豊かさ、優しさの中に収束させる。ヘルはピアノパーpettoの音の意味を明らかにしながら、音色にきらめきと柔らかさを組み合わせ、絶妙の間によって、日本語が立ちのぼってくるかのような響きを創りだす。私たち自身が忘れがちであった日本の詩の音楽的な特徴が浮かび上がったと言ってもいい。23曲が腑分けされることなく取り上げられることによって、この国の歌曲が脈々とした深い流れをなしている。また秋原明太郎、三好達治、北原白秋など、日本語の美を極めた詩の系譜にも思いを至らせた(それだけに歌詞の冊子は付けてほしい)。



とりわけ秋原明太郎の詩に付けた三善晃の「五月」(「抒情小曲集」より)は、音のひたひたとつがまどうこまやかな色が響き合って、浮遊する調性感のなかに、透きとおったかすかな不安をにじませるよう。「私の大好きな五月」その五月が来ないうちに、もしかして死んでしまったら」と続く言葉と音に含まれるなまめかしさも、さわやかさも胸の高鳴りも、おののきもそっと広げて、会場のすみずみまで包み込んだ。(専門編集委員)

論の焦点

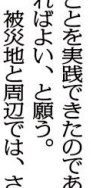
3月

東日本大震災から1年が過ぎた。大震災などの1周年を中心に十数日ぐらいい、心身が不安定になる時期があって、それを「記念日現象」という(中井久夫。「現代思想」3月号)。精神科医であり、阪神大震災で被災した中井は、被災後の個人の精神衛生には、こうでなくちゃならないというところでは思いつかない。ただ、中井は、被災から1カ月ほどの時期に被災地外へ出た際、△ペパトに立ち寄り、最初に目についたものを買おうと決めた△シーロック。ホームスラブは、以後、中井のトレードマークになったとか。

東日本大震災から1年が過ぎた。ホットとさせられるエピソードだが、被災地で活躍した医師には、早世した人も少なくない。中井は、現地で「何かをしている人たち」には、現状の問題や過去の後の課題などを誰かに聞いてもらうこと、専門用語で言う△ヒア・カウンセリングが大切だと強調する。今月は、被災者の証言をまとめた本が複数出版された。赤坂憲雄編、荒蝦夷編集協力の『鎮魂と再生』(藤原書店)、東北大学震災体験記録プロジェクト編の『聞き書き震災体験』(新泉社)、東北学院大学震災の記録プロジェクト、金菱清編の『3・11 働きの記録』(新耀社)だ。証言者は3冊で計260人以上。東北に縁のあるライターらが聞き書きした『鎮魂と……』、東北関係者の声をまとめた『聞き書き……』と、被災者自身が記した『3・11……』と、手法はそれぞれに違っても、それぞれに語り、その経験を語り、結果として「誰かに聞いてもらう」それにしても、私たちは、誰もが弱く、さみしく、優しくない。だから、喪失感にとらわれる。それだけではない。だからこそ「規則」を守り、「礼儀正し」になり、被書者意識に凝り固まり、自堕落になり、人を差別することもある。にもかかわらず、私たちは一緒に、この実践できたのである。被災地と周辺では、さまざまなものが失われてきた。人々物だけではな。見慣れた光景、社会的地位や職業、自尊心……。『中央公論』4月号で、精神科医の斎藤環は「大きな喪失を経験した



中井久夫氏



斎藤環氏

喪失の果てで「強く」なるために

「誰かに聞いてもらう」それにしても、私たちは、誰もが弱く、さみしく、優しくない。だから、喪失感にとらわれる。それだけではない。だからこそ「規則」を守り、「礼儀正し」になり、被書者意識に凝り固まり、自堕落になり、人を差別することもある。にもかかわらず、私たちは一緒に、この実践できたのである。被災地と周辺では、さまざまなものが失われてきた。人々物だけではな。見慣れた光景、社会的地位や職業、自尊心……。『中央公論』4月号で、精神科医の斎藤環は「大きな喪失を経験した

雑誌観測

震災を機に私たちは長いスパンで物事を捉えはじめた。その反映だろう、「100年」を冠した企画を多く目にする。100年前を見つめる。例えば『こころ』最新号は特集「大正時代再発見」。「新潮」は今月も「100年保存大特集」だ。また、読書界の古典プログラムも継続する。現在と未来を考えるヒントを求めて、過去の哲学や歴史学がひもとかれる。標記特集もこの流れをくむ。文学の古典名作のガイドだ。全て文庫で読める定番のみ。6冊ながら細かくなりすぎない配慮が見える。100年前にネットを仮想する文壇コラムや生誕100年の作家の紹介。奥泉光が談話記事で述べるよ

小特集 100年残る本を読む。=POPEYE 4月号 うに、読者は「自分はこれが好きだろう」という勘だけを頼りに本を選べばよい。かつて「カタログ」「コラム」を売りにした同誌は今や完全に「ファッション」に転換。ニーズに合わせた結果だ。とすれば、文学ベースの特集やコラム欄の増設を期待するのはお門違いだろう。しかし、偶然この種の記事を読んで現物に向かう学生たちを間近に見ると、旧態回帰とはいかずとも、第三の道の可能性を夢想してしまう。細分化の果てに別の総合化の流れがある。ニーズとは何か。現実の読者とともに考えたい。(大澤聡・日本学術振興会特別研究員)

へん顔に漂うユーモア 松井えり菜さん作品展 大原美術館 岡山県倉敷市出身の画家、松井えり菜さん「写真」が、同市の大原美術館で新作絵画や立体など19点を発表している。1984年生まれ。東京芸術大学大学院修了。こよなく愛する画生類「パーラー」や少女の「へん顔」を画面いっぱい描いた絵画で注目を集めてきた。現在は東京在住。子も時代、市民向けパスポートを合わせたインスタレーション「サンライズえり菜 Ohara Museum edition」



4月8日まで。月曜休館。【岸桂子】